

燃え落ちる家

世紀転換期の Mark Twain と家庭性の悪夢

細野香里 Kaori Hosono

はじめに

Mark Twain が作家として活躍したのは、アメリカ文学史における家庭小説の隆盛期とされる 19 世紀中葉よりも後の時代であり、概念としての家庭性とジャンルとしての家庭小説を分けて考えた時、Twain による作品を家庭性の観点から分析することは可能であっても、それらを厳密な意味での家庭小説とみなすことはできない。しかし、ある Twain 作品を狭義の家庭小説の形式を換骨奪胎したものと捉えることは可能であろう。このアプローチは、ジャンルとしての家庭小説、あるいは家庭性という概念の応用可能性を提示し得る。そこで本発表では、Twain の後期作品群の一つに数えられる、1899 年から 1903 年にかけて執筆された未完作品 *Which Was It?* (以下、*WWI* と表記) を取り上げ、トウェイン作品における家庭性を再考した。そして、ジャンルとしての家庭小説の隆盛期後に書かれたという意味だけではなく家庭性規範の機能の綻びを描いた作品として、本作を「家庭性の時代」の後の家庭小説と位置付けた¹⁾。

1850 年代の南部を舞台とする *WWI* では、町の名士である George Harrison が経済的苦境に追い詰められた末、殺人を犯し、その嫌疑がもう一人の名士 Walter Fairfax に向けられる中、沈黙を守りながら良心の葛藤に苛まれる。真相を知る混血の自由黒人 Jasper は、Harrison を脅し、彼を奴隷として扱うことで白人への恨みを晴らそうとする。未完作品として 1966 年に出版された後も、本作は英語圏の Twain 研究において重要視されてこなかった。しかし里内克巳が指摘する通り、南部奴隷制の問題を描く *Adventures of Huckleberry Finn* と *Puddin'head Wilson* の「延長線上」に位置し、また晩年の哲学的思考実験作品として知られる *What is Man?* で提唱した人間機械論が作品中盤の「核心部」となっている本作は再考に値する(里内 451、444)。

本発表では、*WWI* における奴隷制の問題とモラルの危機を、家庭性規範の綻びと結び付けて考察した。最初に、未完の枠物語としての *WWI* の形式を確認し、本作を理想の結末への道筋が立たれた家庭小説、あるいは、幸福な結末後の破綻を描いた家庭小説として位置付けた。そのうえで、伝統的家庭性規範において重視される道徳の在り方が、本作では Harrison の罪、人間機械論の論理、そして元奴隷の Jasper のエピソードによって否定されていることを確認した。そして、Twain が破綻した家庭小説としての *WWI* を通じて、アメリカの過去の罪である奴隷制とモラルの問題を描こうとしていたと結論付けた。

1. Domestic Tragedy

WWI は一種の枠物語の形式をしている。Book I と Book II に分かれており、Book I は“The Wife’s Narrative”と銘打たれたセクションから始まる。これは、本編で語られる事件の 15 年前に書かれた George Harrison の妻 Alison の手記であり、幼い二人の娘と一人の息子に恵まれた幸せな家庭の様子が書き綴られている。しかし火災により Alison と二人の娘は命を落とし、手記は途中で途絶える。このあと“Husband’s Narrative”と題された George Harrison による語りのごく短いセクションが続く。Harrison は、妻子が欠けることなく生きていた時はこれといった出来事もなかったものの、それでも妻に倣って日々の様子を書き物に残しただろうが、もはやそんな気も起きなくなってしまったという。代わりに最近の出来事を書いてみるつもりだと述べ、悲劇から 15 年後に Harrison の犯した罪の物語としての本編が始まる(183)。

Nina Baym によれば、“Woman’s Fiction”あるいは 1820 年代から 70 年代にかけて創作された“domestic fiction”においては、孤児あるいは不遇の遺産相続人である少女が周囲の人々との関わりを通じて精神的自立を達成、しばしば幸福な結婚という結末を迎える。こうした設定と筋立ての前提となっているのが、幸福な家庭こそが人間にとっての究極の幸であり、人の生き方に秩序をもたらすものであるという家庭性の理想である(27)。以上を踏まえると、*WWI* は幸せな結婚という結末を迎えた後の不幸を描いた“その後の家庭小説”とも、母親を失った少女の代わりに妻を失った夫 Harrison を主人公に据えた物語とも捉えられる。あるいは家庭小説を広義に、必ずしも不幸ではない平穏な家庭の日常と、主人公の何らかの精神的達成を描くものと考えれば、*WWI* はそのような物語の舞台となる可能性を絶たれてしまった家庭の物語であるともいえる。

Claudia Tate は世紀転換期の家庭小説、あるいは家庭小説の描く理想の実現不可能性について、人種の観点から興味深い議論を提出している。Tate は、家庭性の理想の実現不可能性にアフリカ系アメリカ人女性作家たちが直面していたことを指摘しつつ、彼女たちが家庭性の機能不全を通じて過酷な人種分離の現実を描いていたと論じ、それらの作品を domestic tragedy (家庭悲劇) と呼ぶ(16-17)。Tate の議論で興味深いのは、ジャンルとしての 19 世紀的家庭小説ジャンルが普遍性を失った後も、規範としての家庭性はその影響力を維持したことを、家庭悲劇という世紀転換期の家庭小説の在り方とともに提示した点だ。家庭性の理想の実現不可能性を描くことによって困難な現実を描出するという、典型的家庭小説のネガティブな片割れとしての家庭悲劇の定義は、書かれる前に途絶えた家庭小説であり、家庭小説の理想の成就以降の破綻を描く *WWI* にも応用可能であると発表者は考える。この仮説を踏まえ、*WWI* において、いかに家庭性の理想の破綻が描かれているのかを見てゆく。

2. 妻／母のいない家

Nancy Cott が 1977 年の著作 *The Bonds of Womanhood* で端的にまとめているように、いわゆる家庭性的価値規範においては、家庭、あるいは家庭の守護者とされた女性は、金銭に基づく搾取的な労働の世界のそれとは対極の価値観を護持し、家の者に自制的な道徳観を浸透させることが求められた (69)。Twain の *WWI* では、こうした伝統的家庭性規範を前提としつつ、それが打ち砕かれてゆく様が描かれる。Harrison にとって、道徳的な男としての評価は非常に大きな意味を持っていたが、伝統的家庭性規範においてモラルの守護者とされた女性のいない家庭で、道徳のある男としての自己像を崩壊させてゆく。さらに作品中盤以降、町の “Idiot Philosopher” こと Sol Baily の登場により、道徳心という概念自体に疑義が投げかけられる。Twain の晩年の思想であり、人間は人格を持たない、外部要因によって動かされる機械に過ぎないとする人間機械論を掲げる Baily は、人間に意志は存在しないこと、利己的でない動機に基づく善行だと人が信じているものも、実際には自分自身が不快な思いをしないために、つまり利己心によって出た行動に過ぎないことを滔々と論じる (305-6)。これは、1906 年に Twain の名前を伏せて発行された、老人と若者の対話形式の哲学的作品 *What is Man?* で論じられている主張である。結局は別作品としてまとめられることになる人間機械論は、本筋とは一見関係の内容に思われる。しかし、道徳の否定、人間の善意の否定は、先に確認した伝統的家庭性規範の言うところの道徳の守り手である女性のいない Harrison 家という物語舞台と合わせて、*WWI* が家庭性規範の機能不全を描く、“家庭性の時代” の後の家庭小説であることを示す。

3. 暴君あるいは元奴隷としての「良心」

WWI においては、家庭性の機能不全が語るモラルのテーマと奴隷制との関わりが、不可分に絡み合ったものとして提示されている。物語の後半で、犯した罪に悩み疲れた Harrison は、良心を暴君として、自身をその暴君に振り回される奴隷としてみなす (407)。そして開き直り、これ以上良心に振り回されることはやめようとする。その直後、彼の犯した罪を知る Jasper が現れ Harrison を脅し、元奴隷の立場から一転、主人としての支配的立場を手に入れる (413)。すでに指摘されているように、Harrison が良心からの解放を願った直後に現れ彼を奴隷化する Jasper は、「〈良心〉を擬人化した存在」とみなすことができる (里内 455)。しかしここで疑問に思われるのが、なぜ良心の化身たる Jasper が、白人への復讐心に燃えた悪魔的存在として描かれているのかという点だ。Harrison の伯父と奴隷女性の間生まれた Jasper は、金銭を稼いで自分の自由を買い取っていたが、火災によりその売買契約の証明書を失い、再び奴隷にされ、挙句に改めて自身を買い戻すために貯めていた金を友人の白人女性に騙し取られてしまう。こうして Jasper は白人の仕打ちに対する怒りを募らせ (“brooding vengeance and cursing all the white race without reserve, out of the deepest depths of his heart”) (315)。伝統的な家庭小説において、良心の化身として家庭を守る妻、母親としての立ち位置の登場人物が造形されていたとしたら、長らくそのような存在は Harrison 家から失われていた。Twain は、失われた家庭の天使の代わりに、自らも半分白人の血を引きながら白人種への復讐に燃える Jasper を招かれざる来訪者として Harrison 家に送り込んだのである。異形の良心の化身としての Jasper は、奴隷制が良心、モラルあるいは家庭性規範を変容させ、またその恣意性を露わにするものであることを体現している。妻亡き後の物語としての *WWI* では、自由黒人による白人へ復讐、Twain の晩年の哲学的思想の結晶である人間機械論という要素が一本の線で結びあわされている。奴隷制が家庭性の美德を歪めるものであると同時に、家庭性の美德そのものに本質的に備わる致命的な恣意性があることを、Twain は *WWI* で描き出しているのだ。

¹ 「家庭性の時代」というキーワードについては、増田久美子著『家庭性の時代——セアラ・ヘイルとアンテベラム期アメリカの女性小説』に依拠している。

Works Cited

- Baym, Nina. *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-70*. 1978. U of Illinois P, 1993.
- Cott, Nancy F. *The Bonds of Womanhood: Woman's Sphere in New England, 1780-1835*. 1977. Yale UP, 1997.
- Tate, Claudia. *Domestic Allegories of Political Desire: The Black Heroine's Text at the Turn of the Century*. Oxford UP, 1992.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. Edited by Victor Fischer, Lin Salamo and Walter Blair, U of California P, 2003.
- . *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. 1894. Edited by Hsuan L. Hsu, Broadview Press, 2016.
- . *Which Was It? in Which was the Dream? And Other Symbolic Writings of the Later Years*. Edited by John S. Tucky, U of California P, 1966, pp.177-429. 里内克巳訳 『それはどっちだったか』彩流社、2015年。
- 里内克巳「『それはどっちだったか』とマーク・トウエインの文学——読み終えた人のための解説」マーク・トウエイン著『それはどっちだったか』彩流社、2015年、435-72頁。
- 増田久美子『家庭性の時代——セアラ・ヘイルとアンテベラム期アメリカの女性小説』小鳥遊書房、2021年。